

JUST NOW JATS

特定非営利活動法人 日本胸部外科学会



11

2011-01

CHALLENGE FOR THE FUTURE!

年頭のご挨拶

日本胸部外科学会理事長 田林 暁一

初春を迎えるにあたり、謹んで新年の祝辞とともに、年頭のご挨拶を申し上げます。

昨年は、新しく政権交代で誕生した民主党政権によって受難の年でした。民主党は「脱官僚」「政治主導」を大きな目玉として発足しましたが、種々の問題が起き、非常に不安定な状況にあります。民主党の立てた目標は、それまでの政治スタイルを変えろという点では良かったのですが、それぞれの大臣の発言に確かな根拠がないこと、大臣の補佐集団が組織化されてなく、大臣の個人的見解となり新しい仕組みを動かす力に結びついていないことが最大の問題である様に思われます。この背景は自民党が長く政権を掌握してきたことが大きな要因であると考えられますが、今後政権の継続により政策立案に従事している大臣・副大臣・大臣政務官の政策への習熟度の向上が大きな鍵となると思われるが、果たしてそれまで民主党政権が継続できるかは、不確実な状況の様に思えます。ただ、民主党は医療政策として、勤務医の就業環境改善、医療費の増額、医療従事者の職能拡大と定員増、臨床研修の充実等を掲げ、これらは、

われわれの政策と共通点があり、それらの実行性を期待しているだけに今後の動向は気になるところであります。同じ年にバラックオバマ氏が「change」を掲げ圧倒的な支持を得て最初の黒人の米国大統領となったが、景気がなかなか回復しないことへの国民の不满により中間選挙で民主党の大敗を来したのは、日本の民主党政権と同様に、大きな期待の割には、満足できない。

胸部外科学会の今後の方向性

ところで胸部外科学会に關してですが、徐々にはありますが、今後の方向性が見えつつある様に思われます。学会の最重要事項は学会員の付託に答える事と時代に即応したテーマでの提言と政策を社会に具申していく事にあると考えています。前者に關してはこれまで学術集会のあり方、若手の教育・研修・専門医制度の改善、労働環境の改善を通して種々検討を行ってきました。具体的に学術集会に關しては開催主体を心臓血管外科、呼吸器外科、食道外科の3部門で協調性を持って開催していく方向性を確立し、その事が現実的な結果として、今後3年間の学術集会に表わされた

る成果が得られなかった事、および約束した事に対する履行が不十分であった事への有権者の不満であった様に思われます。

民主党の柱の1つであった「安心と希望の医療確保ビジョン」とオバマ大統領の「医療制度改革」は重要な課題で、特に前者はわれわれ学会にとって労働環境改善および医師と看護師の中間職養成の面で重要なテーマであります。

のは大きな喜びと考えています。専門医制度に關して少し遅れていました食道外科専門医制度も昨年より確立され、昨年の会員数増加は、この事が大きく關与していると推測しています。

学術集会の内容に關しては以前と異なり学会が大きくなると關与する方向性が生まれ、会長の独断性はある程度コントロールされる様になってきました。今後の学会のあり方としては正しい方向性を向いている様に思います。本会では他学会に先駆けて運営会社との複数年契約をしました。その有用性の評価は重要と考えています。最大の今後の課題としては総合学会としての胸部外科学会のあり方であ

労働環境改善の実現に向けて

り、特に構成分野である3分野の専門学会の活性化が得られてきた現時点において、改めて本会の存在意義が問われる状況にあると思われる。今後総合将来計画委員会に本課題を諮問する予定にしています。若手の教育・研修に關しては此処2〜3年産科婦人科学会が開催しているサマースクール等を見学し、その有用性が確認された事もあり、医学生および初期・後期研修医を対象に胸部外科学の魅力伝える様な案を作成し、具体化していきます。専門医制度については心臓血管外科分野で2014年より手術症例の登録制度が開始される事になり、修練医の指導性、修練医の適正の評価に有用と考えています。日本専門医制・評価認定機構で現在検討されている専門医制度は、数のしほり込みと、質の向上を目指すという方向性ではわれわれが取り組んでいる施設集約化と相通する点がありますが、医師と協働する医療スタッフの状況が欧米と大きく異なる事を充分に考慮の上で進める必要があるように考えます。その観点から特に日本専門医制・評価認定機構の動向は注視する事が肝要と考えています。

労働環境の改善は従来から意識調査等を通して実態は把握され、改善を施設にお願いしてきた経緯はありますが、具体的な方策は何等計られてこなかった状況にあります。昨年施行した外科医の週間タイムスタディ調査の結果でも1週間の労働時間は96・7時間で、安全許容時間と言われている80時間を大きく超過しております。現在考えている具体的な対策としては、連続長時間労働の制限(32時間以下)、2週に1日は完全フリーとする等の案が出されていますが、さらに検討を加え、そしてこれらの条件を修練施設認定規則内に含める事を考えています。また、労働環境改善には医師と看護師の中間職の養成も重要で、この案は看護師および臨床工学技士等の方々のキャリアアップ志向とも一致したもので、昨年「特定看護師」の養成が提言された事で大きく前進しましたが、実現化に向けてさらに努力していきます。行政、また社会に対して



田林 暁一
(社団法人全国社会保険協会連合会東北厚生年金病院)
1972年 東北大学医学部卒業、国立水戸病院外科初期研修
1975年 東北大学胸部外科入局
1983年 愛媛大学第二外科講師
1984年 米国ワシントン大学留学
1990年 東北大学胸部外科講師
1994年 東北大学医学部胸部外科教授
1999年 東北大学心臓血管外科教授
2010年 社団法人全国社会保険協会連合会東北厚生年金病院
病院長
東北大学 名誉教授
趣味：スキー
好きな言葉：興譲、一生勉強・一生青春

対外的に提言、意見を述べていく事も本学会に課せられた大きな命題と考えています。これまで日本医師会、日本専門医制・評価認定機構、厚生労働省に対して医師会のあり方、専門医制度の構築、チーム医療の推進について提言、意見書を送ってきました。今後は、学術調査結果の公開、日本医学会のあり方、医療の質の評価、医師と看護師の中間職養成に関する事項で政策検討委員会を中心に提言をまとめ、発表していきます。終りに、この新しい年を皆様が健やかに過ごされることをお祈りするとともに会員各位のさらなる発展を祈念致します。

Half a Century as a Heart Surgeon

私は1922年、和田禎純と靖子（はるこ）の長男として札幌に生まれた。父は18年間滞米生活を送った法学博士、母は東京女子師範学校（現お茶の水女子大学）を卒業した才媛であった。

札幌一中（現札幌南高）を4年で修了した私は、北海道大学予科（医学進学課程）特待生として医学を学び、1944年医学部を首席で卒業した。細菌免疫学に興味があったが、わが国は支那事変、やがて太平洋戦争へと軍国主義をひた走りと、外科医が必要ということで柳壯一教授の第二外科に入局する。多くの先輩や

胸部外科今昔

Half a Century as a Heart Surgeon

和田 壽郎



同級生が軍医として召集されたが、私は大学院特別研究生として医局に残ることになった。終戦後の1949年、急激に米国の情報が入るようになり、札幌にあった民間情報教育局（CIM）図書館で、米国では心臓病の手術治療が行われていることを知り大きなショックを受けた。これが、その後の私の進路を決めることになった。

わが国初の胸部外科学教室を開設

夢は大きく膨らみ、やがて日本医師第1号として、まだ連合国軍占領下のわが国からGARIOA奨学生としてミネソタ大学に留学する機会を得た。1950年のことである。もちろん船旅で、ポケットにしのばせたのは父の友人からの500ドルほどであった。ミネソタでは偉大な師、Prof. Owen H. Wangensteenの下でDr. N.E. Shumwayや南アフリカ共和国のDr. C. Barnardらと共に働くことになった。その当時の仲間

は後に皆、教授となり、長く親交を保った。

米国に着いてからの苦労は日本のそれとは比べべくもなく、早朝から深夜に及ぶ診療・手術に加え、終戦後間もないこともあって日

本人に対する憎しみは消えず、言葉のハンデ以上に過酷な滞米生活であった。やがて1年ごとにニューヨーク州立療養所、オハイオ州立大学、そしてハーバード大学のスタッフとして黎明期の胸部外科学を学び働くことになった。私が特に影響を受けたのはハーバードのProf. Dwight E. Harken（銃弾を心臓から摘出）であった。5年間の月日は苦しくも楽しく過ぎ、やがて「新しき酒は新しき器に」と懸望され、1954年札幌医科大学にわが国初の胸部外科学教室をつくるべく帰国した。

当時のわが国の外科診療体制はお粗末なうえに、外科医の間には心臓にメスを入れることを躊躇する傾向があった。また、挿管麻酔すら行われていなかったのである。私はDeWitt-Lillieheart型人工肺、エマソン自動呼吸器と熱電対同時記録心電計を持ち帰り、わが国の直視下心臓内手術のスタートに大きな貢献をしたと思う。

私が札幌医科大学の教授に就任したのは35歳。わが国で初めての白靴、白ズボン、白上着、胸にローマ字のネーム、首から下げるステスコープ。今では当たり前のことが、当時は種々

写真1 漏斗胸に対する新しい術式「胸骨翻転手術法」

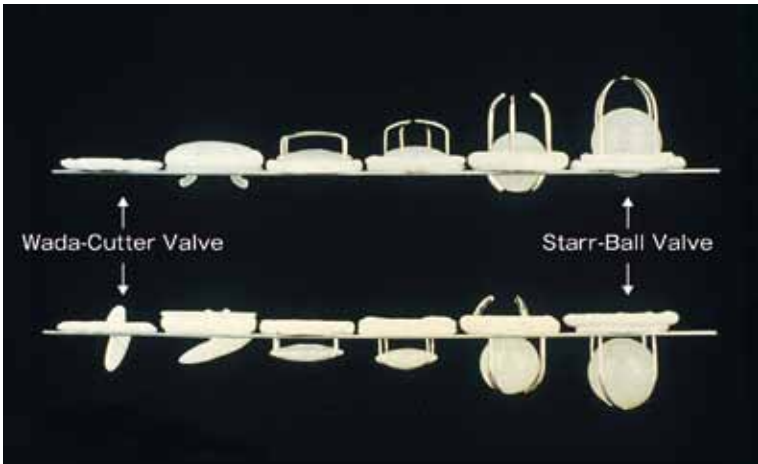


写真2 Space occupationの最も少ないWada-Cutter弁（左）

年記念講演会及び祝賀会を開催し、共に働いた仲間と祝うことができた。感無量であった。

1968年に心臓移植手術を行う

1959年にわが国初の漏斗胸手術を行い、1963年には漏斗胸に対する胸骨翻転手術法を考案した（写真1）。1963年和田人工心肺装置はDr. Harken

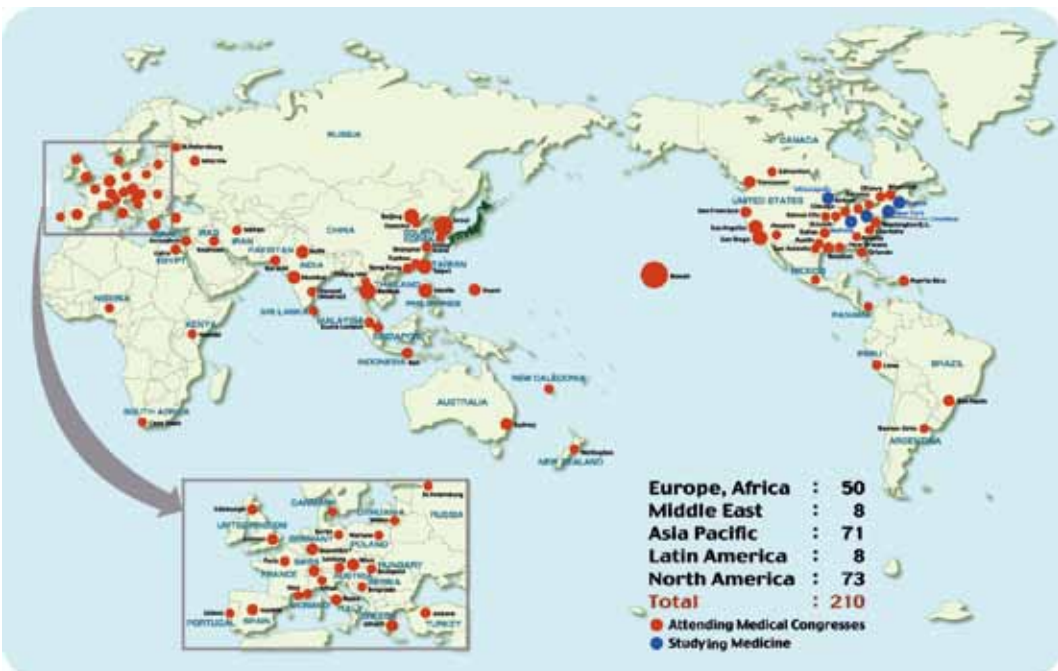
写真3 米国胸部外科学会でWada-Cutter弁を発表。右はDr. F. X. Byron



写真4 1968年、ケープタウンにDr. C. Barnardを訪ねる

の要請でハーバード大学DDB工へ。1966年、小船に乗って川を下っていたときに思いついた人工弁はこれまでのケージ弁の考えを一掃したringees、すなわちspace occupationの最も少ない人工弁（写真2）として米国胸部外科学会で発表した際（写真3）、standing ovationで賞賛されたことは忘れることができない。Wada-Cutter弁の誕生であった。特筆すべき

図 国際会議等の出席で訪れた国は約50か国、訪問回数は200回を超える



は、世界初のCooley-Lilleaの人工心臓4弁に使用され、現在ワシントンのスミソニアン博物館に展示されている。その他の和田式心臓外科手術機器類は、シカゴの国際外科博物館に納められている。

1968年、心臓移植手術が各国でスタートした。私としては、かねてから実験を重ね、また南アのBarnard博士を訪ね意見を交わす（写真4）等、充分準備を

していたので、与えられたチャンスであった。世界で30例目、当時2番目の長期生存であったが、わが国では臓器移植という考え方が理解されず、漢方医からの告発を受け、不起訴無罪となるまで随分時間がかかった。しかし、私は今でも良い手術を行ったと思っている。

私の手術を受けるために世界中から患者が訪れる一方、ICS（国際外科学会）、

Half a Century as a Heart Surgeon



写真5 心臓外科領域の七賢人に選ばれた世界的権威。左からA. Carpentier (仏)、D. Cooley (米)、A. Jatene (ブラジル)、D. Ross (南ア)、A. Starr (米)、和田壽郎、M. Yacoub (エジプト) の各博士

ACCP (米国胸部疾患学会)、ATCVSA (アジア胸部外科学会)、PPSA (汎太平洋外科学会)、WSCS (世界心臓胸部外科学会、和田が創設)、WATS (世界人工臓器免疫移植学会) 等々の会長職も多忙で、世界中を駆け巡っていた。創設会長、名誉会長、顧問等を書き出すと、とてもこの紙数では書ききれない。図に示したように、国際会議等の出席で世界の都市を訪問した回数は200回を超えた。

1977年、東京女子医科大学に赴任。国際関係の仕事は、さらにエスカレートした。1987年、東京女子医大を定年退職し、計30年間の教授生活にピリオドを打った。東京女子医大でも常により仲間にも恵まれ、共に精力的に患者さんへの奉仕、より良い手術手技の開発、医学への貢献を目標として取り組めたことに感謝している。

2007年には、ギリシヤのアテネで世界7人の賢者(心臓外科医)として、A. Carpentier、D. Ross、D. Cooley、M. Yacoubらと共に名誉ある称号を授与された(写真5)。かつては良きライバルとして戦った仲間達である。現在私は、88歳。米寿のお祝いを今年(2010年)3回開いていただき、延べ260人余の方々から暖かい祝福を受けた。時々学会にも出席、新しい医術に目をみはり若き日の自分に重ね合わせることにしきり。日々、52年連れ添った妻と和やかに過している。若き胸部外科医の御健闘を祈る。

第34回日本胸部外科学会を主宰

私は第34回日本胸部外科学会の会長に指名され、1981年9月24～26の3日間、東京の国立教育会館で学術集会を開催した。発表演題数は心臓328、肺119、食道44の計491題。会長講演のタイトルは「心臓代用弁—変遷を中心に」であった。

会長の言葉として、学会抄録集におよそ次のように記載した。

「欧米におけるこの種の学会は、肺、食道、心臓の三本柱を大切に守って来ている現状に鑑み、本学会でもできる限りその方向に沿って行うようにした点で苦労しました。シンポが一般に長時間で疲れる傾向にあるのを避けるため、時間を一律90分とし、要点を判りやすくするよう試みました。近年、アジア諸国からの参加者も少なくなく、スライドになるべく英語を用いるようお願いしました。海外からの著名な外科医と若い会員が直接話し合えるようにと、Meet the Expertsを計画しました。」



和田壽郎
(札幌医科大学名誉教授)

1944年 北海道帝国大学卒業
1950年 GAROIA奨学生として米国に留学
1954年 わが国初の胸部外科学教室を札幌医科大学に開設。同大学助教授
1958年 札幌医科大学教授
1959年 わが国初の漏斗胸手術
1963年 漏斗胸に対する胸骨翻転手術法を考案、健康保険の適応に
1967年 米国胸部外科学会でWada-Cutter弁を発表
1968年 アジア初の心臓移植手術を行う
1972年 米ヴァンダービルト大学教授(～1973年)
1977年 東京女子医科大学第一外科主任教授。札幌医科大学名誉教授
1987年 東京女子医科大学を定年退職。和田記念心肺研究所所長
2001年 第6回世界人工臓器免疫移植学会(カナダ・オタワ)で、臓器移植等の発展に貢献した医学者“Living Legends”(12人)の1人として選ばれる

2003年 米テキサス心臓研究所名誉会員
2004年 汎太平洋外科学会(PPSA)生涯功労者
2005年 アジア胸部外科学会(ATCVSA)特別功労賞
2007年 第1回七賢人シンポジウム(ギリシヤ・アテネ)で心臓血管外科分野の“Seven Wise Men of the World”の1人として顕彰されるこのほか受賞歴多数。

【著書】ゆるぎなき生命の塔を—信夫君の勇気の遺産を継ぐ(青河書房、1968)、神から与えられたメス(メディカルトリビューン、2000)ほか、多数

【趣味】ドイツリートをドイツ語で歌う。ゴルフ
【好きな言葉】「全ては基礎医学に始まる。実験は大切である。」

胸部外科医を目指そう！

医学生・研修医のみなさんへ

日本胸部外科学会では若手育成ワーキンググループを中心に、将来の胸部外科医を目指す医学生・研修医を募集しています。今過酷な外科医の勤務状況が叫ばれるなか、専門性が高い胸部外科領域の医師不足が深刻になりつつあります。しかし高い技術を要求される反面、外科医として大変やりがいがある領域です。日本胸部外科学会はそういう人たちを応援します。男女は問いません。以下は私たちの具体的な行動計画です。

- 1 あなた方の将来に関する、どんな質問にもプロフェッショナルが親切にお答えします。詳細はホームページを参照してください。
- 2 全国5ブロックで開催される地方会に自分が経験した症例報告、ミニ研究などを発表できる機会を設けます。
- 3 全国の医学生や研修医を対象としたサマースクールを計画しています。
- 4 女性医師の勧誘・支援のため日本胸部外科女性医師の会が活動しています。

百聞は一見に如かず、私達の世界に飛び込んでください。

日本胸部外科学会
ホームページ

<http://www.jpats.org/>



※画面は制作中のものです。公開時には多少変更になる場合があります。

若手医師の立場から

専門医を取得されている、もしくは取得を目指す若手の先生方に、日々感じていること、将来の目標などを語っていただきました。

若手医師の立場から 1

出会い

呼吸器外科との出会いは、医学部5年生の時に病棟実習でいわゆる「メジャー」と呼ばれる科の中で最初に配属されたのが呼吸器外科でした。

一番初めだったこともあり、先輩の先生方に言われるままに、回診、手術、検体処理、病棟業務、抄読会など朝早くから晩遅くまで非常に充実した実習をさせていただきました（実は、生真面目に実習に参加していたのは同学年の中でも私だけだったらしいことを、数年後に大学に帰室した時になって知りましたが）。そもそも、もともと呼吸器に興味があり、病棟実習の中で、実際にモノを触ることができると外科系に強く興味を惹かれていたため、その両者を満たす科は呼吸器外科しかありませんでした。初期臨床研修を行う初めての学年だったこともあり、同期の友人たちは卒業

時点で志望診療科を決めない人も多かったように記憶していますが、その中で明確に決めていた「変わり者」の一人だったのではないかと思います。

すべては患者様のために、という「基本理念」

初期臨床研修といえば、初期臨床研修をさせていただいた病院との出会いがあります。大学と直接関連のない病院ではありましたが、研修病院紹介のセミナーで私が時間を間違えてこの病院のプレゼンテーションを聞いたことがきっかけでこの病院に惹かれ、縁あって初期臨床研修をさせていただきますました。この病院では診療科にとらわれず幅広い研修をさせていただくことができ貴重な経験を得ることができました。

また、この病院には「基本理念」とよばれる印象的な標語があります。それは、すべては患者様のために。研修中に刷り込まれたこの言葉は今も私の心に

深く根づいています。

医師としての勇気と希望と情熱と

大学卒業から現在にいたるまで、診療科問わず非常に多くの指導医の先生方に出会い、直接間接問わずご指導いただきました。おかげさまで、いつも実力不足気味（すみません）の私が、ここまで大きな事故を起こすことなく無事に臨床を行うことができました。また、先生方の適切なご指導により私自身が医師としての仕事に勇気と希望と情熱を持つことができるようになったかと思うと、先生方への感謝の気持ちでいっぱいです。

若手医師の立場から 2

私が外科医になった理由

2004年4月から現在の臨床研修制度が義務化され、僕の学年はその1期生となりました。もともと救急医療に興味を持っていたので、初期研修は救急医療

一瞬の貴重な出会いに感謝を

人生の中の貴重な出会いとは、その時その場限りの貴重な一瞬に生まれるものだと思います。こうした出会いに感謝すると共に、出会いの一瞬を大切に生きていきたいと考えています。



山内良兼
(慶應義塾大学医学部外科学教室(呼吸器))

卒業大学：慶應義塾大学医学部
2004年 慶應義塾大学医学部卒業
2004年 国保旭中央病院(初期臨床研修)
2006年 慶應義塾大学医学部外科学教室入局
2006年 公立福生病院にて一般外科研修
2007年 国際親善総合病院にて一般外科研修
2008年 慶應義塾大学医学部外科学教室(呼吸器) 帰室
2009年 慶應義塾大学大学院医学研究科博士課程入学

趣味：旅行、スポーツ観戦
好きな言葉：一期一会

患者さんが良くなっていくことのうれしさ

研修を通じて手技や手術の難しさも感じましたが、治療し、良くなっていく患者さんをみていく楽しさも感じました。もちろん結果の良くない症例もあり苦しい経験でしたが、振り返ってみて楽しくもあり充実した2年間と思えました。それは患者さんが良くなっていくことのうれしさ、苦しいことより自分にとって大きかったのだらうと思います。その中でダイナミックで様々な疾患を扱える外科を専門にしようと考えました。

責任もやりがいも大きく

後期レジデントの4年間は、胸部腹部の別もなく、開胸、開腹、鏡視下手術など様々な手術に入り、忙しい日々を過ごしました。研修医時代とは違い、責任がより大きくなり苦しいことも多くなりましたが、やりがいも大きくなり楽しみながら仕事ことができました。

一方では、この期間で胸部症例の経験が少なく感じていましたし、他施設での手術も経験したいと考え、今年の春に現在の病院に仕

事の場を移しました。現在は食道癌、乳癌を中心に手術や化学療法を勉強しています。経験が浅い分戸惑うことも多いですが、新しい考え方や、やり慣れていた手技など緊張感を持って取り組んでいます。その中で食道癌手術など、患者さんの負担の大きな手術において、どのような工夫を加えればより安全に経過するかを考えながら過ごしています。

いつまでも楽しく仕事を

今後、食道癌を含む消化管手術を中心に、胸腔鏡腹腔鏡も経験を積みながら成長していきたいと思っています。いつまでも楽しさを感じながら、仕事に臨んでいけたらと思います。



湊 拓也
(徳島大学病院胸部内分泌腫瘍外科)

卒業大学：徳島大学
2004年 徳島大学医学部卒業
2006年 徳島赤十字病院初期研修開始
(外科)
2010年 徳島大学病院胸部内分泌腫瘍外科医員

学会の活動を多くの人に知ってもらおう！

会員のみなならず、誰にでも気軽に読んでもらえる紙面作りで、胸部外科領域や学会の活動をより多くの方へ伝えます。

若手医師や学生に、胸部外科領域に関心をもってもらおう！

胸部外科領域の「魅力」や「やりがい」を若手医師や学生に伝え、この領域への関心をより深めてもらいます。

記者は、会員のみなさまです！

このNewsletterは、みなさんに書いていただいた記事で構成されています。是非ご協力いただき、より充実した内容にしていきたいと思います。

アイデア大募集！

「こんな企画があったら…」や「ためになるのでは…」というアイデアを募集しています。お名前・所属を添えて、以下のメールアドレスまでお送りください。 ※採否につきましては、採用をもって代えさせていただきます。

jats-adm@umin.ac.jp

会員の皆様へ

特定非営利活動法人日本胸部外科学会会員証発行についてのご案内

第64回日本胸部外科学会定期学術集会(2011年10月9～12日開催・上田裕一会長・名古屋)から「会員証」による自動発券機システムを導入することとなりました。学術集会の参加証にお名前・ご所属などが自動印字されたものが発券され、これにより各種参加管理が出来るようになります。(http://www.congre.co.jp/jats64/)

今後、全会員の皆様の会員証を作成し、2011年中頃にお手元に届くようお送りする予定です。本会ホームページ(http://www.jpats.org/)の会員専用ページから所属情報などの確認(変更)をお願いいたします。特に4～6月は住所変更が多い時期ですので、必ずお早めに登録情報の変更を行ってください。

何卒、よろしくお願い申し上げます。

特定非営利活動法人
日本胸部外科学会 会員証
The Japanese Association for Thoracic Surgery

山田 太郎
Taro Yamada

会員番号：123456

Impact of main bronchial lymph node involvement in pathological T1-2N0M0 non-small-cell lung cancer: multi-institutional survey by the Japan National Hospital Study Group for Lung Cancer

優秀論文賞を受賞して①

前田 元

今回対象となった論文
「Impact of main bronchial lymph node involvement in pathological T1-2N0M0 non-small-cell lung

今後のさらなる
データの蓄積と、
新たな知見に期待

この度は名誉ある賞をいただき、いささか臺が立ちかけた外科医としては恐縮しております。
実は2004年にも当時在籍していた澤端章好君がこの賞を受賞しており、刀根山病院としては2度目の受賞となります。

2010年度
日本胸部外科学会 優秀論文賞

「優秀論文賞」 受賞者の声

本年度の日本胸部外科学会「優秀論文賞」
受賞者の先生方2名に、研究の要旨と喜び
の声を聞きました。



cancer: multi-institutional survey by the Japan National Hospital Study Group for Lung Cancer」は、国立病院機構肺がん研究会での共同研究によるものです。昨年



国立療養所肺がん研究会と
言い、1972年に私の恩
師であります故澤村献児先

前田 元
(独立行政法人国立病院機構刀根山病院呼吸器外科)
卒業大学：大阪大学
1977年 大阪大学医学部卒業、大阪大学第一外科にて研修
1978年 国立病院機構近畿中央胸部疾患センター外科勤務
1980年 社会保険紀南総合病院外科勤務
1982年 大阪大学第一外科勤務
1987年 国立病院機構愛媛病院外科勤務
1992年 国立病院機構刀根山病院呼吸器外科勤務
趣味：音楽(ピアノ、ギターを少々)、読書(司馬遼太郎にはまっています)、ゴルフ、山歩き
好きな言葉：Challenge

国立病院機構肺がん研究会について説明をさせていただきます。前身は

欧米ではすでに
肺癌の発症率が
減少に転じる

肺癌のTNM分類が改訂され、リンパ節マップも従来我が国で使われてきたNanuke mapからIASLC mapに変更になりました。主気管支周囲リンパ節はNanuke mapでは#10に、欧米で使われていたMountain mapでは#11に分類されていましたが、今回の改訂で世界共通のマップを用いることになりました。今後さらなるデータの蓄積とともに、新たな知見が出るのが期待されます。

Prediction of postoperative hepatic dysfunction after cardiac surgery in patients with chronic congestive heart failure. Gen Thorac Cardiovasc Surg

優秀論文賞を受賞して②

西 宏之

この度は、私の論文「Prediction of postoperative hepatic dysfunction after cardiac surgery in patients with chronic congestive heart failure. Gen Thorac Cardiovasc Surg 2009 Jul;57(7):357-62」が栄えある日本胸部外科学

生たちが中心になって結成されました。それまでの療養所は結核医療を担っていましたが、リファンピシンの登場とともに外科治療の対象症例は激減しました。それに替わって肺癌が増加し、今後の療養所の外科は肺癌診療に転換して行かなければならないとの強い思いがあったものと推測され

ます。予想は的中し、我が国でも肺癌が癌死の第1位を占めるようになりました。欧米では肺癌の発症率はすでに減少に転じていますが、我が国ではまだまだ増加中です。禁煙運動の推進も含め、肺癌の撲滅を目指して頑張りたいと思います。

会優秀論文賞を受賞させていただき身に余る光栄と存じます。
**適切なリスク評価に
不可欠な術前予測**

本論文は、術前に中等度以上の三尖弁閉鎖不全を呈する弁膜症症例の中で、術後に肝機能障害を合併する症例の予測スコアの作成とその有用性に関して検討したものです。
重症弁膜症症例の中には長年続いた肝うつ血により肝臓の予備能が低下した症例が少なからず認められます。そのような症例は手術というストレスに対し、術後著明な高ビリルビン血症を呈し、場合によっては術後肝不全から多臓器不全に発展して生命予後に大きな影響を与えます。このような症例の術前予測は、適切なリスク評価には不可欠であり、昨今のEUROSCORE

やSTS scoreにも反映されない肝機能障害の開心術への影響を明らかにするためにも非常に重要であると考えられます。

**大阪大学という
環境が生んだ論文**

論文を読み感想を頂いた方からまず頂戴する意見として、「弁膜症術後にこのような肝障害はそんなに発生するのだろうか?」、というものがあります。大阪大学は伝統的に重症心不全症例が多いのでこのような症例の頻度は高く、そのような環境の中でこの論文は生まれました。そういった意味で私の受賞は大阪大学の諸先輩方を代表してのものであり、改めて諸先輩方にも感謝の意を表したいと思っております。

**日本の医療レベルの
高さを再認識**

オーストラリアやドイツへの留学での経験、種々の国際学会でのディスカッションを聞く度に、日本の医療レベルの高さを再認識するとともに、もっとこのすばらしい成績を世界に発信せねばとの思いが強くなります。

今回の肝機能スコアもT-bil、Alb、CHEの3つを

使った単純なものです。で、更にその有用性を検証して世界に発信していく必要があると思っております。
今後もしも若輩者ですが、日本胸部外科学会を通じて日本の心臓血管外科の発展に少しでも貢献できればと考えております。
最後になりましたが、改めて本学会の栄えある賞を頂きまして、編集委員会や選考委員会の皆様、日本胸部外科学会の会員の皆様に、この場を借りまして心より厚く御礼申し上げます。

西 宏之
(大阪大学大学院医学系研究科 外科学講座 心臓血管外科)
卒業大学：大阪大学
1995年 大阪大学医学部卒業
1999年 大阪市立総合医療センター
2004年 オーストラリア アルフレッド病院 クリニカルフェロー
2006年 オーストラリア プリンスタチャールズ病院 レジストラ
2007年 兵庫医科大学
2010年 ハノーファー医科大学、現職
趣味 音楽鑑賞、ゴルフ
好きな言葉 全力を尽くす。信じる。



第28回日本呼吸器外科学会 開催にあたって

第28回日本呼吸器外科学会を、大分県別府市で2011年5月12、13の両日開催させていただく予定です。今回のテーマは、真我恒心と目立たぬように掲げていますが、意味はご随意に解釈してください。呼吸器外科医を目指して修練している若い先生方にとって、真に呼吸器外科手術の勉強になる総会にしたいとの思いです。

2010年の日本胸部外科学会の年次報告によれば、肺癌の手術は肺葉切除が最も多く年間20、000例を超え、うち50%に胸腔鏡下手術(VATS)が行われています。VATSの定義や呼び名はどうあれ、これには、覗き見(直視併用)

川原克信
(大分大学医学部 総合外科学第二 教授)

卒業大学：長崎大学
1971年 3月 長崎大学医学部卒業
1971年 6月 長崎大学医学部付属病院 第一外科(研修医)
1983年 6月 トロント大学(カナダ) 胸部外科 留学
1993年 8月 長崎大学医学部 第一外科(医学部助教授)
1994年10月 福岡大学医学部 第二外科(医学部助教授)
2003年 9月 大分大学医学部総合外科学第二講座(教授)
現在に至る

趣味：ドライブ
好きな言葉：ダメでもともと



VATSと、テレビ(モニター視) VATS、が含まれています。いずれにしても開胸手術ができるようになってからVATSを！と思っても、施設によっては開胸手術がほとんど無く、いきなりVATSを習得しなければならないことも少なくないと思います。私の施設でもそうです。ドライラボ、ウェットラボ、アニマルラボなど、トレーニングの方法はいろいろありますが、なんといっても手術場で熟練者の手術を実地に、見て、学ぶに越したことはありません。やってみせて、言ってみせて、やらせて見て、ほめてやらねば、人は動かず。と山本五十六元帥の語録にあります。とにかくまずは、見て、学ばねばなりません。総会では手術の現場を実際にお見せすることはできませんので、VATSと開胸下の肺葉切除および区域切除、また近年、社会の関心を集めている胸膜中皮腫の外科手術など、身に付けておかなければならない基本的な手術を、見て、学ぶビデオセミナーを設けます。大いに勉強していただきたいと思っています。

私が30代、40代のころ、血沸き肉躍る、思いをした肺癌の拡大手術は、すっ

かり影が薄くなってしまう。しかし進行癌で発見される症例が無くなることはありません。合併症が多く予後の改善が得られない、という理由で、外科手術を諦めてばかりでは、難しい手術を成功させて患者を治す、という外科の最大の魅力を捨て去ってしまうことになるかと危惧いたします。有触れた症例を無難に手術するのも外科医の大切な使命ですが、やっぱり、手術はやっていて面白くなければ続けられ

るものではありません。「胸腔鏡手術は患者にやさしい手術だから」などといった言い訳が本音かもしれない。進行癌に対するアジュバント手術やサルベージ手術を無事成功させるのは、決して易しいことではありません。これに挑戦するのも外科医の使命であり、手術の魅力の一つだと思います。ビデオシンポジウムを企画します。ぜひご参加ください。

第41回日本心臓血管外科学会 学術総会開催に当たって

来る2011年2月23日から25日まで、東京ディズニーランドに隣接する東京ベイ舞浜ホテルクラブリゾ

ートで、第41回日本心臓血管外科学会学術総会をお世話することになりました。東京医科大学が主催されて

いただくのは、本総会が初めてのことであり、大変光栄であり、先輩及び会員諸兄に篤く御礼申し上げます。既に1000題近い演題応募を頂き、プログラム作成に教室員一同が邁進して

いるところであります。2月末ともなりますと未だ寒い時期ではありますが、日差しに春を感じさせ、早くも伊豆の河津桜は満開になる季節です。多数の会員諸

重症患者がいると1週間や10日間位は病院で寝泊まり、6階にある病室のベランダから上野や湯島の青い灯、赤い灯を眺めながら、何と異次元の空間にきてしまったのだろう、と不思議な感じがしたものでした。採血から点滴の仕方、何も知らない若造を相手によくぞ先輩は付き合ってくれたものだ、今になって心から感謝、また何も恩返しが出来ていないことを恥じる次第です。それから40年近く、1年365日24時間勤務、正月は無し、という原則に基づく外科医生活が続いてきました。(この様なことを書くとは外科医希望者が少ないのに余計なことを、とお叱りを受けるかも知れませんが)。

さて、個人的には本学会に入会させていただいて35年が過ぎました。卒業して1年間の研修医生活を送りましたが、最初に回ったのは故三枝正裕教授が主宰しておられた東京大学胸部外科でした。中ベンには布施

勝生先生、田中尊臣先生、オーベン先生、三井利夫先生や古瀬 彰先生などでした。当時は6月から研修が始まったのですが、学生気分が抜けない小生は、第一週の日曜日は家にいてノンビリしていたところ電話がかかってきて、「何をしているのだ!」。

慌てて登院して研修生活が始まりました。血管外科領域を専門とするルートとしては、小生のように一般外科から入る経路と最初から心臓血管外科に所属して入る経路があり、わが国の医局講座制に拠る所が大きいのが現状ですが、グローバルには心臓外科と血管外科は別に考えられていた国が殆どであります。欧米では、Cardio-



重松 宏
東京医科大学外科学第二講座(血管外科)
1972年 東京大学医学部医学科卒業
1976年 東京大学医学部付属病院第一外科入局
1981年 医学博士号取得(東京大学)
1984年 米国留学(州立 Florida 大学外科)
1993年 東京大学医学部第一外科学講座講師
1998年 東京大学大学院医学系研究科血管外科学分野助教授
2003年 東京大学医学部付属病院手術部長
2005年 東京医科大学外科学第二講座主任教授(血管外科)
趣味：スキー、ゴルフ、読書
好きな言葉：「矜持」

thoracic、かVascular、に分かれるのが一般的で、アジアでもCardiovascular、としている国は日本と台湾位で、その他の国では分けられているものの、Vascular、が独立領域となる

には、動脈硬化性血管疾患患者の増加を必要としていました。第二次世界大戦が終わって半世紀以上を経過し、経済成長と食生活の改善や高齢者の増加がアジアでの糖尿病や脂質異常症の急増をもたらした結果としてわが国に限らずアジアを含めた多くの国で血管疾患が増加し、Vascular surgeryの必要性が高まっています。本総会では、血管外科領域の演題が多くなる傾向にあります。専門領域にとらわれず幅広い知識を得る場とすることが出来ればと念じております。

編集後記

今回のnewsletterはNo.11であるが今年の新年号である。今年の干支はウサギである。皆様にとって飛躍の年であることを願っている。

田林理事長の年頭のご挨拶は胸部外科学会の発展の為になみなみならぬ決意を示されています。平成22年のGen Thoracic Cardiovascular Surgの優秀論文賞を獲得された前田元先生、西宏之先生の受賞の言葉を寄せて頂いたがご両人とも受賞の対象になった仕事グループとしての仕事であることを強調されている。若手胸部外科医を代表して、山内良兼先生(慶応大学)、湊拓也先生(徳島大学)に胸部外科を専攻したきっかけ、理由について寄稿して頂きました。

また今回から「胸部外科今昔」として心臓血管外科、食道外科、呼吸器外科の領域の大先輩の方々に寄稿をお願いすることになり、今回第1回は和田壽郎先生(第34回日本胸部外科学会会長)に、Edwin a century as a Heart Surgeon、をしたためて頂いた。次回は末舛恵一先生、次回は掛川暉夫先生にお願いしています。学術集事情として今回は第41回心臓血管外科学会について東京医科大学重松宏会長に、また第28回日本呼吸器外科学会について大分大学の川原克信会長にご寄稿願った。

また本学会では若手医師の入会を促す為に研究・教育委員会の中で胸部外科若手育成ワーキンググループ(小川純一委員長)を結成して様々な取り組みを行っており今回は医学生・研修医への呼びかけを行っているが皆様方からも若人を我々の仲間に入ってもらうように働きかけて欲しいと思います。

広報委員会 委員長 安元公正